

アメリカ合衆国における幼児期 インクルージョンの指導法の検討

— Activity-Based Intervention からみた早期介入/
幼児特殊教育の効果・形態・傾向を中心に —

水内豊和

(2002年9月30日受理)

An Early intervention approach to young children with special needs
in inclusive setting in the United States:
The effectiveness, setting, and adaptation issues of early intervention,
especially an Activity-Based Intervention

Toyokazu Mizuuchi

Increasingly, early childhood programs include children with disabilities and typically developing children. The purpose of this study is to examine for some aspects of early intervention / early childhood special education (EI / ECSE) affect the early childhood inclusion in the United States. First, the empirical literature about activity-based intervention (ABI: Bricker, et al., 1998) underlies the practice of early intervention were summarized in order to provide a context for effectiveness of intervention / special education from early childhood. In early 1990's, with the expanding of inclusion, it was needed that the approach which suitable for practice based on the concept of inclusion, and at that time ABI approach is focused by the field of early childhood special education. ABI is "a child-directed, transactional approach that embeds children's individual goals and objectives in routine, planned, or child-initiated activities and uses logically occurring antecedents and consequences to develop functional and generative skills (Bricker, et al., 1998, p.11)". Second, the comparative studies of developmental and social gains of children with disabilities in integrated and segregated preschool programs were discussed to consider the place for provide an appropriate practices for children with disabilities. Third, some trend about recent naturalistic approach represented by ABI used in inclusive early childhood education setting were described. Recently, ABI and early childhood education philosophy are integrating together to produce successful inclusion for all children. In addition, it was expected that the amount of empirical studies for quality of effective inclusion as follows; "relationship" and "membership" with peers as well as consider the effectiveness of EI / ECSE.

Key words: Early Intervention / Early Childhood Special Education (EI / ECSE), Activity-Based Intervention (ABI), inclusion

キーワード：早期介入／幼児特殊教育，保育活動に即した介入，インクルージョン

I. はじめに

近年、健常児、障害児を問わず、すべての子どものための通常教育を目指すインクルージョン (inclusion) という動向が、アメリカ合衆国においては障害児教育の大きな潮流となっており、また世界的にも広く注目を集めている。わが国でも、特に乳幼児期は、障害のある子どももいない子どもも「『いっしょの保育』を実現しやすい時期」(野口, 2001) であるという認識のもと、保育所や幼稚園などの地域のリソースにおいて統合形態で保育が実施されることは珍しいことではなくなっている。アメリカ合衆国では、公立の幼稚園のうち、実に81.5%がインクルーシブな状況での保育を実施しているというデータ (Wolery, Holcombe, Brookfield, Huffman, Schroeder, Martin, Venn, Werts, & Fleming, 1993) が示すように、インクルージョンの概念は、全米特殊児童教育協会の幼児部会 (Division for Early Childhood of the Council for Exceptional Children: DEC) などの支持も受けて、乳幼児を対象とする幼児教育界に広く浸透したようである (DEC, 1993; Bredekamp, 1993; Klein & Gilkerson, 2000)。

しかし、インクルージョンの理論的な整理は進む一方で、実践的視点からの検討は立ち遅れている、との指摘もある (York & Tundidor, 1995; 吉利・藤井, 1998)。このことは、単に学齢期以降の問題ではなく、乳幼児期の早期介入/幼児特殊教育¹⁾サービスに関しても例外ではない。今日、わが国では統合保育は浸透したかのように見えるが、実際には、障害児を現前にしてその対応に苦慮する保育者が見受けられることが少なくないのである。その背景にはさまざまな原因が推定できるが、ひとつには、これまでの分離形態での保育や、個別的介入で得られてきた研究成果の蓄積により、障害の種類や程度に応じた個々の「障害幼児の保育」方法こそ確立され提供されてきたものの、「統合保育」の方法についての体系的な研究はなされてこなかったということが予想される²⁾。

アメリカ合衆国では、1990年代に入ると、現在のわが国と同様に浮上していたこの問題に対し、障害幼児の教育に関する研究者たちは、インクルージョンの概念を具現化する保育には方法論が不可欠との認識を示し、本質的で実用的な実践方法を模索するようになる (Odom & Diamond, 1998)。そして今日では、インクルーシブな設定で、子どもの日々の生活の文脈の中で介入を図ろうとする、自然主義的アプローチ (naturalistic approach)³⁾の実施が推奨されてきている。その中でも、日常の保育活動の中に、個々の特別

なニーズに適した介入を取り入れていく「Activity-Based Intervention: 保育活動に即した介入 (以下ABI とする)」(Bricker & Cripe, 1992; Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas, 1998) は、インクルーシブな保育状況での活用が有効なアプローチのひとつとされている (Diamond, Hestenes, & O'Connor, 1994; Novick, 1993; Udell, Peters, & Templeman, 1998)。

本論では、この ABI アプローチを早期介入/幼児特殊教育の方法に関する諸問題を検討する上での基軸として、(1)障害幼児にとっての早期からの介入・教育の効果、(2)分離設定と統合設定という保育形態と効果、そして(3)自然主義的アプローチと教授訓練的アプローチ (didactic approach) の関係、について検討をおこなう。

なお、ABI を中心として諸問題を検討するという本論の視点は、恣意的で、ともすれば客観性に欠けるという危惧をはらむ。しかし、ABI が他の介入アプローチと比べ、幼児特殊教育が本格的に研究領域として捉えられ始めた1970年ごろからすでに統合保育についての多くの実証的研究がおこなわれており、今日ではインクルージョンの実現を見据え、理論的に体系化されてきた点を評価した上でこの視点を設定する。

II. 介入アプローチとしての ABI

Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas (1998) は、ABI を以下のように定義している (訳については修正意見・議論を待ちたい)。

「保育活動に即した介入 (ABI) とは、機能的⁴⁾かつ一般化しうるスキルの発達を目的に、ルーチン活動、計画された活動、または子どもの自発的な活動の中に個々の子どもの長期目標 (goal) や短期目標 (objective) を取り入れ、そして必然的に生起する先行事象 (antecedent) とその結果事象 (consequence) とを利用した、子どもの主体性を尊重したかかわりに基づくアプローチである (Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas, 1998, p.11, 筆者訳)。

この定義についての解説は既述されているが (水内, 2001), 簡潔に言えばこのアプローチは、幼稚園やチャイルドケアセンターにおける保育活動を、登降園やおやつなどの日々のルーチン、保育者による設定保育、そして自由遊びの3つの場面と認識し、これら活動を個々の子どもの IEP で定められた目標へ到達できるような介入の機会と捉え、あくまで子どもの自発性を尊重しながら応用行動分析的方法に基づき介入を図るというものである。こうした幼児の日々の生活の文脈に目標をはめ込む (embed) 形式の介入アプローチを

総称して自然主義的アプローチとされる。これは個別的で介入者主導の教授訓練的アプローチと対比され、主として言語・コミュニケーション介入の領域から発展してきたものである (Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas, 1998)。

III. 早期介入／幼児特殊教育の効果

1. 早期介入／幼児特殊教育の効果に関する研究動向

早期から、障害児に対し介入をおこなうことで、その子どもの弱点を克服させようとする試みは、19世紀のイタール、セガン、モンテッソーリにその系譜をみることができる (Boyd, 1914)。事実 ABI アプローチの開発は、教育的な介入を適切で機能的 (functional) なものにするという価値を明確にしたイタールやセガンなどの業績に、多大な影響を受けているという (Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas, 1998)。とりわけアメリカ合衆国において早期介入／幼児特殊教育が研究領域として発展するのは、1950-60年代にかけての脱施設化といった社会運動や、行動分析研究の円熟に続く1970年初頭である (Brown, 1997)。

1990年代を迎えるまで、種々のアプローチに基づく早期介入／幼児特殊教育の効果に関する研究は数多くなされたが、こうした評価研究を評して Guralnick (1997) は、「早期介入プログラムは本当に効果がある、という結果を一般的に支持すること (p.11)」に寄与した「第一世代」の研究であると述べている。現在、障害の早期発見、早期介入はもはや当たり前のことと認識されており、「どのアプローチが果たして効果的なのか」を検証する、早期介入研究の第二世代の時期であると言える。

2. 早期介入／幼児特殊教育アプローチの効果を支えるABI

ABI の効果についての研究も、先の Guralnick の区分に倣えば、早期介入は効果があるかを検討した第一世代研究と、ABI は他のアプローチと比べどのよう効果があるのかを検討した第二世代研究とに分類できよう。ここでは、ABI の効果についての研究を、Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas (1998) によるレビューを補足する形で概括する。

Bricker & Sheehan (1981) は、生後6ヵ月から5歳までの、障害のない子どもから重度の障害のある子ども総勢100人以上を対象に、2年間の介入プログラムを実施した。効果を評定するために、各種の集団基準準拠型テスト (norm-referenced test) および目標基準準拠型テスト (criterion-referenced test) を、

1年を一区切りとして、それぞれの年度の前後に実施している。プリテストならびにポストテストの比較の結果、ほとんどのテスト項目で子どもの発達の諸領域において有意な成績の向上がみられた。

Bricker, Bruder, & Bailey (1982) は、41人の幼児の集団におけるABIの影響を報告している。年齢別に infant unit (0-18ヶ月), toddler unit (18-36ヶ月), preschool unit (36-60ヶ月) という3つのクラスでプログラムが実施された。そして評価の指標として、30ヶ月以下の子どもには集団基準準拠型テストとして Bayley Scales of Infant Development, 30ヶ月以上には McCarthy Scales of Children's Abilities, ならびに目標基準準拠型テストとして Student Progress Record および Uniform Performance Assessment が用いられ、先の Bricker & Sheehan (1981) の研究と同様、プリテスト・ポストテストの研究デザインが採られた。その結果、目標基準準拠型テストではプリテスト時とポストテスト時との成績に有意な向上がみられ、集団基準準拠型テストにおいても、preschool unit における一般認知能力の下位検査を除いては成績の向上に有意差が認められた。なお、研究の対象となっているクラスは、1/3から半数ほどの健常児と、さまざまな障害のある子どもから構成されており、統合形態での介入プログラムを受けている。

Bailey & Bricker (1985) は、さまざまな障害のある乳児から3歳までの80人以上の子どもを対象としてABIの効果を検証している。これまでの研究と同様、プリテストとポストテストの比較分析をおこなった。その結果、目標基準準拠型テストの結果では、すべての子どもが有意な成績の向上をみせており、集団基準準拠型テストにおいても、発達指数以外では成績の向上に有意差が認められたことを報告している。

Bricker & Gumerlock (1988) は、乳児から2歳児まで総勢46人にABIを実施し、その効果を報告している。そしてこれまで同様、プリテスト・ポストテストとの成績を比較した結果、子どものパフォーマンスはすべてのテストにおいて、そのほとんどの下位検査で成績の向上に有意差が認められた。この研究では、あわせて障害幼児の早期介入プログラム (Early Intervention Program: EIP) 策定のための評定システムの開発に重点が置かれていた。この研究は後に、IEP作成に効果的なツールとなる、「早期介入の診断・評価・計画システム: AEPS」(Assessment, Evaluation, and Programming System for Infants and Children: Bricker, 1993; Bricker & Pretti-Frontczak, 1996; Bricker & Waddell, 1996; Cripe, Slentz, & Bricker, 1993) に結実している。

この時期の一連の研究は、先述のように早期からの教育的対応の効果を示すことで、その必要性を主張するものという性格を帯びている。これは折しも1975年に制定された全障害児教育法 (Education for All Handicapped Children Act; P. L. 94-142) が、州の規則で定められている場合を除き、障害のある就学前の子どものための教育的サービスを要求していないことに関係していると想定される。その結果、障害のある乳幼児は地方教育局の責任のもとに置かれるようになった。こうした政府の未対応と財政的危機が、「費用対効果」の良い介入アプローチ、つまり直感的にみて「統合 (integration)」保育アプローチの開発に帰結したようである (Bricker, Bruder, & Bailey, 1982)。

3. ひとつの早期介入／幼児特殊教育アプローチとしてのABI

Losardo & Bricker (1994) は、発達の遅れのある、またはその疑いのある47ヶ月から66ヶ月までの幼児計6名に対し、語彙の獲得とその般化に関してABIと直接的指導 (direct instruction) とを実施し、その効果を比較している。この研究では、両指導が交互に実施される研究デザインを用いている。その結果、直接的指導のほうが語彙をはやく習得したが、般化の点ではABIを用いたほうが有意に好成績であった。加えて、習得した語彙の保持については、直接的指導に比べてABIの成績のほうが有意に優れていた。

この研究は、これまでの研究とは異なり、スキルの習得や発達の程度を検証するにとどまらず、その維持と般化に注目したこと、さらには他の介入方法と比較したということでABIの新たな可能性を証明したと言える。しかし、標準化された検査などで評価されるスキルや知識の習得、認知の発達といった面での介入効果は立証されるものの、社会性やコミュニケーションといった領域については、効果の程は明らかではない。こうした側面についての介入の効果を評価する必要があるとともに、「どのようなアプローチが効果的か」を検証する、いわば介入の効果についての「第二世代」の研究が今後積み上げられる必要があるだろう。

IV. 幼児期における分離／統合の問題

教授訓練的な指導とABIのような自然主義的な指導のいずれが障害児の介入に有効かという議論は、すなわち保育形態が分離か統合か (segregation vs. integration)、さらに言えば除外か包括か (exclusion vs. inclusion) という議論に密接に関連してくる。分離設定、統合設定におけるABIの効果に関する比較

研究はなされていないため、ここでは広く分離／統合問題について着目する。

分離か統合かといった議論は、アメリカ合衆国においてもこれまで多く議論されてはいるものの、そのほとんどは学齢期以降の児童・生徒が対象であり、幼児期についてそれを実証的に示した研究は少ない。加えて、単に統合保育環境に障害児を措置することで発達の変化あるいは社会性の習得を査定する研究は多くみられるものの、その効果を、分離状態の保育と比較して示した研究はそれほど多くはない。

比較研究を概観すると、前アカデミックな知識・スキルの習得、言語・認知・運動の発達、社会性の向上といったそれぞれの領域について、大筋で、あるいは一部に関して、障害児にとって統合保育環境は分離設定と同等の成績か (たとえば Buysse & Bailey, 1993; Lamorey & Bricker, 1993; Odom & Diamond, 1998)、分離設定よりも効果的であるという結果が示されている (たとえば Altman & Kanagawa, 1994; Hundert, Mahoney, Mundy, & Vernon, 1998; Jenkins, Odom, & Speltz, 1989; Odom & McEvoy, 1988)。

しかし、これらの研究では必ずしも一致した結果が示されていないようである。たとえば社会性についてみると、Guralnick & Groom (1988) は、分離保育に比べて統合保育形態において、中度な発達の遅れのある幼児は、社会的で複雑な遊びが頻繁に生じたことを報告している。また Buysse & Bailey (1993) も、統合保育設定のほうが障害児にとって社会性の獲得ならびに行動変容の面で効果的であるとしている。Hundert, Mahoney, Mundy, & Vernon (1998) は、特に重度障害児について研究した結果、分離状態に比べて統合状態において社会的相互作用が多かったことを報告している。その一方で、Jenkins, Odom, & Speltz (1989) は、障害児の社会的な相互作用におよぼすと考えられている「健常児と一緒に」という環境の影響は、わずかでしかないことを示唆している。

このような研究結果の相違は、単純に分離保育、統合保育という区分には収まりきらない個々の介入サービスの違い (介入時間や指導方略、保育者－子どもの人数比など) や、研究の対象児、手続きといった研究の方法論の違いが影響しているのであろう。

事実、Buysse & Bailey (1993) は、介入効果を実証する研究は、以下の点で方法的に問題があると指摘している。まず第一に研究の対象となるサンプルが少ないことである。彼らのおこなった統合／分離問題に関する研究レビューでは、22件の研究のうち、30人以上を対象としたものはわずかに3件しかなかった。第二に、こうした研究では重度障害児を対象としたもの

表1. 幼児期のインクルージョンにおけるサービス形態

サービス形態	特 徴
巡回型直接サービスモデル (itinerant / direct services model)	幼児教育の教師が活動を立案し、特別なニーズのある子どもは、すべての子どもの指導をおこなう幼児教育クラスに措置される。そして巡回型特殊教育教師または関連サービスのスタッフが定期的にクラスを訪れる。これらのスタッフが個別的な指導やセラピーを、クラスの活動とは違う設定において提供する。その際にはかなり教授訓練的 (didactic) なアプローチが用いられる。
巡回型相談モデル (itinerant / consultative model)	特殊教育教師や関連サービスのスタッフが、幼児教育クラスにおいて指導や個別教育プログラム (IEP) の目標をクラスの活動にはめ込む (embed) 方法について相談を受ける。
チーム指導モデル (team teaching model)	通常教育教師と特殊教育教師とが主担任教師の役割を共有するモデルである。両方の教師がカリキュラムの計画にたずさわることが、特殊教育教師はとりわけ日々のルーチン活動の中で小集団に対して指導をおこなう。
幼児教育モデル (early childhood model)	幼児教育教師と補助教員とでおこなわれる。特殊教育教師ともかかわりを持つ。ここでは大集団の中での、教師主導の指導ならびに、子どもの主体的な活動が重要である。
逆統合モデル (early childhood special education inclusive program / reverse inclusion)	クラスは、主に障害幼児と、少数の健常児とで構成される。ここでは、より教師主導型で小集団での活動を重視した特殊教育アプローチが用いられる。
統合活動モデル (integrated - activities model)	健常児は通常教育クラスへ、障害児は特殊教育クラスへ措置される。一日の活動のうちの一部、クラスが一緒にされ、そこでは、子どもの主体的活動から教師主導の大集団活動まで幅広くおこなわれる。

McWilliam, R. A., Wolery, M., & Odom, S. L. (2001) Instructional perspectives in inclusive preschool classrooms.

In M. J. Guralnick (Ed.) Early childhood inclusion: Focus on change. Brooks, 503-527. をもとに著者作成.

が少ないことが挙げられる。第三にこうした研究のほとんどが大学の研究施設において実施されたものであり、実際に統合保育を受けている時間はわずかにしか過ぎないということである。

なお、指導・介入において、対象が個別か集団かという点についても分離／統合問題と関連している。しかし、表1に示すように、アメリカ合衆国では幼児を対象としたさまざまなサービス提供モデルが存在し、IEP・IFSPにそって適切なサービスが適用がされているのが現状であり、形態による介入の効果について共通の認識を求めるのは容易ではないだろう。なお、ABIでは、個別的介入、集団の中での介入のどちらにも対応できるように配慮された保育計画の作成と実施手続きが用意されている (Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas, 1998)。

V. 自然主義的アプローチと教授訓練的アプローチ

Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas (1998)によれば、自然主義的アプローチの端緒は、1970年代までさかのぼる。この時期、幼児の感覚運動、社会性、コミュニケーションなどについて認知心理学の領域より研究がなされた。そして特に乳・幼児期でのコミュニケーション能力の確立の重要性が明らかにされると、障害幼児の言語介入方法にかかわる研究者は、介入プログラムにこうした理論を統合しようと試み始めた。たとえば、Mahoney & Weller (1980) は、子どもが

日々行っている環境との相互作用の中に介入を融合させるアプローチを提唱した。MacDonald & Horstmeier (1978) も、健常幼児のいる環境の中で、障害幼児が相互作用することの重要性を強調した言語介入アプローチを開発している。

一方で、応用行動分析の研究者もまた、1970年代になると、あまり構造化されていない (less-structured) 介入方略を模索し始めるようになった。特に、カンザス大学の研究者グループは、機会利用型指導 (incidental teaching) や、環境による言語指導 (milieu language teaching) を中心とした研究を進めた。Hart & Risley (1975) は機会利用型指導について、「自然主義的で、構造化されていない状況で生起する、大人と一人の子どもとの間の相互作用」と定義している。

このような流れを汲み1980年代になると、多くの研究者が、従来までの、子どもの生活の文脈を無視した、絵の命名や統語論の体系のドリル学習のような教授訓練的なアプローチに対し、機能的な言語・コミュニケーションスキルの指導に焦点化したさまざまな訓練方法を開発するようになったという。

Bricker, Pretti-Frontczak, & McComas (1998) は、自然主義的な指導アプローチの開発が進んだ理由として以下の4点を挙げている。第一に障害幼児が幼稚園などのインクルーシブな環境へ措置されることが増えるにつれ、このプログラムに用いるアプローチが保育者に必要になったことによる。第二に多くの親が家庭における日々のルーチンにこうした方略を使用す

ることが容易であることを理解・賞賛したことによる。第三に構造化された状況における教授訓練的な指導では般化が困難だということである。そして第四に障害児とその親に幼児教育プログラム作成のためのガイドラインであるDAP（初版：Bredekamp, 1987; 改訂版：Bredekamp & Copple, 1997）が1987年の初版以降広く認知されたことでDAPとの併用が容易な自然主義的指導アプローチの採用を促進したことによる。

このように、当初、言語とコミュニケーションの領域における介入方略として登場した自然主義的指導アプローチは、幼児特殊教育から幼児教育領域を含めたインクルーシブな保育を支えるアプローチへと発展したのである。

ただし、Hemmeter (2000) は、1990年以降、早期介入ならびに幼児特殊教育に関して、1,000を超える研究が報告されているものの、自然主義的なアプローチが教授訓練的アプローチよりも果たして効果的であると結論付けるには、アプローチ間の相対的な比較検証が少ないことを指摘している。むしろ、自然主義的アプローチと教授訓練的アプローチは、単に対立概念ではなく、数ある指導アプローチの連続体と捉えるべきであろう。現にDECは、幼児特殊教育の指針とも言える「推奨する実践 (Recommended Practices)」の中で、こうした介入方略の連続体を認め、かつその有効性を示唆している (Wolery & Sainato, 1996)。そして、指導・介入の時と場、ならびに子どもの特別なニーズの状態などによって介入方略を使い分けることが適切な保育的配慮であると言えよう。

VI. おわりに

ABIに代表される自然主義的な指導方略は、インクルーシブな状況において、クラスの統率者としての教師の役割が、抽出指導のようにクラスという集団から離れて個人活動や小集団活動に割かれることがないため価値あるツールとされており、またこうしたアプローチは、これからも進化を続けると目されている (Odom, 2000)。そしてこのような進化につれて、インクルージョンの効果についての測定基準が変わることが予想される。Odom (2000) は、インクルージョンに関する総合的なレビューと展望の中で、これまでのインクルージョンに関する研究では、その効果の検証は発達検査などの標準化された指標によって示される発達やスキルの獲得という視点によるものが主流であったが、近年になってようやく、知識・スキルの習得という観点に加え、成員性：membership（たとえば、クラスに完全な成員として子どもが参加すること

と、関係性：relationship（たとえば、子どもの仲間や大人との相互作用により反映されるもの）についてもインクルージョンの質的側面として捉える必要性が認識されてきつつあるとしている。さらに今後は、クラスにおいて有意義な学習活動に積極的に従事している程度を示す指標が必要であるという。そして、「参加することによって学習する」という、Lave & Wenger (1991) の言う、状況的な学習 (situated learning) 理論に注目する必要性も提唱されている。このように、障害幼児（近年では幅広い対象概念として「特別なニーズのある幼児」と称される傾向にある）にとって望ましいサービスは、インクルージョンの実現とともに変容してきている。

本論の検討を通して、ABIの早期介入／幼児特殊教育の指導アプローチとしての意義は確認された。しかし、それと同時に、今日のインクルーシブな状況における保育では、保育・介入により、単に子どもが発達し、行動的に変容したということにとどまらない、インクルージョンの質的拡充とその評価が問われ始めている。このようなアメリカ合衆国における幼児期のインクルージョンに関する研究動向については論を改めて検討する必要があるだろう。

【註】

- 1) 早期介入 (early intervention: EI) ならびに幼児特殊教育 (early childhood special education: ECSE) は、アメリカ合衆国ではEI/ECSEと併記されることが多い。区別して使用する際には、早期介入がより個別的な介入の意味で使われることが多いのに対して、幼児特殊教育は、幼稚園・チャイルドケアセンターなどの幼児教育施設での教育サービスを指し、いわゆる幼児教育 (early childhood education) と対比する意味合いで、あるいは幼児教育の一領域として包含される意味で用いられる傾向がある。また、早期介入と幼児特殊教育の用語の別の用例として、子どもの年齢で区分している場合もある。DECは「早期介入は3歳以下の、幼児特殊教育は3歳から5歳の子どもに対するサービスとサポートを指す (Sandall & Smith, 2000, p.2)」と定義している。
- 2) 統合保育の方法論として、応用行動分析的視点を基盤とした「相互行動的アプローチ」を提唱する園山も、わが国の統合保育の現状を以下のように指摘している。

「…わが国でも統合保育の方法論が確立されていないのは同様である。たとえば、統合保育をおこなっている保育所を対象としたある調査では、多くの保

母が障害のある幼児の保育はやりがいはあるものの、専門的な知識や方法論が不十分なために、毎日の保育に不安のまま試行錯誤的に取り組んであることが明らかにされている。ノーマリゼーションの進展とあいまって統合保育が推進されるようになったとはいえ、現場の保育者が頼りにできる方法論が見つからないのが現状である（園山，1996，p.5）。

- 3) 自然主義的アプローチ (naturalistic approach) とは、activity-based intervention (Bricker, Pretti-Fontczak, & McComas, 1998; Losardo & Bricker, 1994), incidental teaching (Hart & Risley, 1968), mand-model procedures (Warren & Warren, 1980), milieu teaching (Kaiser, 1993), natural language training (Koegel, 1987), time-delay prompting (Halle, Marshall, & Spradlin, 1979) といった特定の介入を包含する、一般用語となっている (Odom, 2000; Diamond, Hestenes & O'Connor, 1994)。
- 4) 機能的なスキル (functional skill) とは、正確な方法、自立を促進する方法であり、社会的・物理的環境の中で対処するためのスキルである。それはたとえば、食べ物の写真をみてそれを認識できる (ラベリング) ことを学習するよりも、おやつにおいてジュースやクラッカーを要求するスキルを意味している (Diamond, Hestenes, O'Connor, 1994)。

【引用文献】

- Altman, R. & Kanagawa, L. (1994) Academic and social engagement of young children with developmental disabilities in integrated and nonintegrated settings. *Education and training in mental retardation and developmental disabilities*, **29**(3), 184-193.
- Bailey, E. & Bricker, D. (1985) Evaluation of a three-year early intervention demonstration project. *Topics in early childhood special education*, **5**(2), 52-65.
- Bear, D. (1981) The nature of intervention research. In R. Schiefelbusch & D. Bricker (Eds.) *Early language: Acquisition and intervention*. University park press, 559-573.
- Boyd, W. (1914) *From Locke to Montessori: A critical account of the Montessori point of view*. George G. Harrap. 中野善達・藤井聰尚・茂木俊彦訳 (1979) *感覚教育の系譜—ロックからモンテッソリへ*. 日本文化科学社.
- Bredenkamp, S. (1987) Developmentally appropriate practice in early childhood programs serving children from birth thorough age 8: Expanded edition. NAEYC.
- Bredenkamp, S. (1993) The relationship between early childhood education and early childhood special education: Healthy marriage or family feud? *Topics in early childhood special education*, **13**(3), 258-273.
- Bredenkamp, S. & Copple, C. (1997) *Developmentally appropriate practice in early childhood program: Revised edition*. NAEYC. 白川蓉子・小田豊・芦田宏・北野幸子・森真理・門田理世訳 (2000) *乳幼児の発達にふさわしい教育実践*. 東洋館出版社.
- Bricker, D. (1989) Early intervention for at-risk and handicapped infants, toddlers, and preschool children. VORT corp.
- Bricker, D. (1993) AEPS measurement for birth to three years. Brookes.
- Bricker, D., Bruder, M., & Bailey, E. (1982) Developmental integration of preschool children. *Analysis and intervention in developmental disabilities*, **2**, 207-222.
- Bricker, D., & Cripe, J. J. W. (1992) *An activity-based approach to early intervention* (1st ed.). Brookes.
- Bricker, D. & Gumerlock, S. (1988) Application of a three-level evaluation plan for monitoring child progress and program effects. *Journal of special education*, **22**(1), 66-81.
- Bricker, D. & Pretti-Fontczak, K. (1996) AEPS measurement for three to six years. Brookes.
- Bricker, D., Pretti-Fontczak, K., & McComas, N. (1998) *An activity-based approach to early intervention* (2nd ed.). Brookes.
- Bricker, D. & Sheehan, R. (1981) Effectiveness of an early intervention program as indexed by child change. *Journal of the division for early childhood*, **4**, 11-27.
- Bricker, D. & Waddell, M. (1996) AEPS curriculum for three to six years. Brookes.
- Brown, W. H. (1997) Inclusion: A time to include and support young children. *Dimensions of early childhood*, **25**(3), 3-5.
- Buysse, V. & Bailey, D. B. (1993) Behavioral and developmental outcomes in young children with disabilities in inclusive and segregated settings: A review of comparative studies. *The journal of*

- special education, **26**, 434-461.
- Cripe, J., Slentz, K., & Bricker, D. (1993) AEPS curriculum for birth to three years. Brookes.
- Diamond, K. E., Hestenes, L. L., & O'Connor, C. E. (1994) Integrating young children with disabilities in preschool: Problems and promise. *Young children*, **49(2)**, 68-75.
- Division for Early Childhood, Council for Exceptional Children: DEC (1993): Position on inclusion. <http://www.dec-sped.org/positions/inclusion.html>.
- Guralnick, M. J. (1997) Second-generation research in the field of early intervention. In M. J. Guralnick (Ed.) *The effectiveness of early intervention*. Brookes, 3-20.
- Guralnick, M. J. & Groom, J. M. (1988) Peer interactions in mainstreamed and specialized classrooms: A comparative analysis. *Exceptional children*, **54**, 415-425.
- Halle, J., Marshall, A., & Spradlin, J. (1979) Time delay: A technique to increase language use and facilitate generalization in retarded children. *A journal of applied behavior*, **12**, 431-439.
- Hart, B. & Risely, T. (1968) Establishing use of descriptive adjectives in the spontaneous speech of disadvantaged preschool children. *Journal of applied behavior analysis*, **1**, 109-120.
- Hart, B. & Risely, T. (1975) Incidental teaching of language in the preschool. *Journal of applied behavioral analysis*, **8**, 411-420.
- Hemmeter, M. L. (2000) Classroom-based interventions: Evaluating the past and looking toward the future. *Topics in early childhood special education*, **20(1)**, 56-61.
- Hundert, J., Mahoney, B., Mundy, F., & Vernon, M. L. (1998) A descriptive analysis of developmental and social gains of children with severe disabilities in segregated and inclusive preschools in southern ontario. *Early childhood research quarterly*, **13(1)**, 49-65.
- Jenkins, J. R., Odom, S. L., & Speltz, M. L. (1989) Effects of social integration on preschool children with handicaps. *Exceptional children*, **55**, 420-442.
- Kaiser, A. P. (1993) Functional language. In M. Snell (Ed.) *Instruction of students with severe disabilities* (4th ed.). Macmillan, 347-379.
- Klein, N. K. & Gilkerson, L. (2000) Personnel preparation for early childhood intervention programs. In J. P. Shonkoff & S. J. Meisels. (Eds.) *Handbook of early childhood intervention: (2nd ed.)* Cambridge university press, 454-483.
- Kogel, R. (1987) A natural language teaching paradigm for nonverbal autistic children. *Journal of autism and developmental disabilities*, **17**, 189-200.
- Lamorey, S. & Bricker, D. (1993) Inclusive programs: Effects on young children and their parents. In C. A. Peck, S. L. Odom, & D. D. Bricker (Eds.) *Integrating young children with disabilities into community programs*. Brookes, 249-270.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge university press. 佐伯胖訳 (1993) *状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加*. 産業図書.
- Losardo, A. & Bricker, D. (1994) A comparison study: Activity-based intervention and direct instruction. *American journal on mental retardation*, **98(6)**, 744-765.
- MacDonald, J. & Horstmeier, D. (1978) Environmental language intervention program. Charles E. Merrill.
- Mahoney, G. & Weller, E. (1980) An ecological approach to language intervention. In D. Bricker (Ed.) *Language resource book*. Jossey-Bass, 17-32.
- McWilliam, R. A., Wolery, M., & Odom, S. L. (2001) Instructional perspectives in inclusive preschool classrooms. In M. J. Guralnick (Ed.) *Early childhood inclusion: Focus on change*. Brookes, 503-527.
- 水内豊和 (2001) 幼児特殊教育 (ECSE) と Activity-Based Intervention (ABI) —統合保育の実践方法に関する検討—。広島大学教育学研究科紀要, **50(3)**, 123-130.
- 野口明子 (2001) 就学前の対応について。SNEジャーナル, **7**, 32-34.
- Novick, R. (1993) Activity-Based intervention and developmentally appropriate practices: Points of convergence. *Topics in early childhood special education*, **13(4)**, 403-417.
- Odom, S. L. (2000) Preschool inclusion: What we know and where we go from here. *Topics in early childhood special education*, **20(1)**, 20-27.
- Odom, S. L., & Diamond, K. E. (1998) Inclusion of young children with special needs in early childhood education: The research base. *Early childhood research quarterly*, **13(1)**, 3-25.

- Odom, S. L. & McEvoy, M. A. (1988) Integration of young children with handicaps and normally developing children. In S. L. Odom & M. B. Karnes (Eds.) Early intervention for infants & children with handicap. Brookes, 241-268.
- Sandall, S. & Smith, B. J. (2000) Introduction to the DEC Recommended Practices. In S. Sandall, M. E. McLean, & B. J. Smith (Eds.) DEC Recommended Practices in early intervention / early childhood special education. Sopris west, 1-3.
- Udell, T., Peters, J., & Templeman, T. P. (1998): Form philosophy to practice in inclusive early childhood programs. Teaching exceptional children, **45**, 44-49.
- Warren, R. A. & Warren, S. F. (1980) Mands for verbalization: Facilitating the display of newly taught language. Behavior modification, **4**, 361-382.
- Wolery, M., Holcombe, A., Brookfield, J., Huffman, K., Schroeder, C., Martin, C., Venn, M., Werts, M., & Fleming, L. "The extent and nature of pre-school mainstreaming: A survey of general early educators." Journal of special education, **27(2)**, 1993, 222-234.
- Wolery, M. & Sainato, D. M. (1996) General curriculum and intereventon strategies. In S. L. Odom & M. E. McLean (Eds.) Early intervention / early childhood special education: Recommended practices. Pro-ed. 125-158.
- York, J., & Tundidor, M. (1995) Issues raised in the name of inclusion: Perspectives of educators, parents, and students. Journal of the association for persons with severe handicaps, **20(1)**, 31-44.
- 吉利宗久・藤井聰尚 (1998) わが国におけるアメリカのインクルージョン研究—その視点と動向—. 岡山大学教育学部研究集録, **109**, 29-37.
(主任指導教官 坂越正樹)